博士論文（要約）

論文題目　　戦国期京都の都市社会と法華宗

氏　　名　　長﨑　健吾

【目次】

序章　中世都市研究史と本論文の課題　……1
第一節　中世都市研究史の概観　1
第二節　中世都市研究と法華宗　9
第三節　本論文の視角と構成　12

第一部　法華宗の勢力拡大過程

第一章　室町戦国期京都における法華宗諸門流の動向　……27
はじめに　27
第一節　法華宗の社会的地位と門流　28
第二節　寺院の活動と門流との相関　―弾圧の事例を手がかりに―　37
おわりに　46

第二章　室町戦国期京都における談義の展開　……53
はじめに　53
第一節　談義の基本的特質　55
第二節　談義の開放性と論争的性格　69
第三節　都市民の心性と法華宗　76
おわりに　83

補論①　戦国期京都の法華宗信仰　―近衛家の事例から―　……93
はじめに　93
第一節　近衛家当主と法華宗信仰の関係　94
第二節　近衛家の女性と法華宗信仰　98
おわりに　―法華宗信仰と家―　100

第二部　戦国期宗教勢力としての法華宗
第三章　戦国期京都の酒屋・土倉と法華宗　……１０９
はじめに　１０９
第一節　酒屋・土倉における法華宗の浸透　１１０
第二節　酒屋・土倉をめぐる法華宗と山門の関係　１１６
おわりに　１２２
第四章　天文初期の畿内情勢と法華一揆の活動　……１２９
はじめに　１２９
第一節　天文元年における情勢　１３０
第二節　天文二年における法華一揆の活動　１４１
第三節　法華宗教団の変容と天文法華の乱　１５１
おわりに　１６２
第三部　都市民の社会的結合と法華宗
第五章　天正四年洛中勧進に見る法華宗教団と信徒　……１７３
はじめに　１７３
第一節　奉加者・奉加額の決定過程　１７４
第二節　洛中勧進における信徒と町の位置付け　１８９
おわりに　１９９
第六章　戦国期京都における都市民の社会的結合と「家」　……２０５
はじめに　２０５
第一節　法華宗教団による「家」の把握　２０６
第二節　都市民の地域的結合と婚姻　２１３
第三節　西陣地域における都市民の社会的結合　２１８
おわりに　２２４

補論②　天正期京都における法華宗信徒の分布状況……２３７
はじめに　２３７
第一節　信徒の分布状況　２３８
第二節　上京と下京の関係　２４０
第三節　地域密着型寺院の成立　２４５
おわりに　２４７
終章　結論と展望……２５５
第一節　考察成果の概観　２５５
第二節　本論文の意義と展望　２５９
初出一覧　２６６

【本文】5年以内に出版予定

【参考文献一覧】

・秋山國三『近世京都町組発達史』（法政大学出版局、一九八〇年、初出一九四四年）
・秋山國三・仲村研『京都「町」の研究』（法政大学出版局、一九七五年）
・朝尾直弘著作集７『身分制社会論』（岩波書店、二〇〇四年）
・朝尾直弘著作集６『近世都市論』（岩波書店、二〇〇四年）
・阿諏訪青美『中世庶民信仰経済の研究』（校倉書房、二〇〇四年）
・阿部泰郎「室町時代の一律僧の生涯　―『鎮増私聞書』をめぐりて」上・下・補遺（『春秋』三一三・三一四・三一六、一九八九～一九九〇年）
・網野善彦「造酒司酒麹役の成立」（『網野善彦著作集』一三、岩波書店、二〇〇七年、初出一九七八年）
・網野善彦『日本中世都市の世界』（講談社、二〇一三年）
・網野善彦『無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和―』（平凡社、一九九六年、初出一九七八年）
・有賀喜左衛門『日本の家族』（至文堂、一九六五年）
・安藤弥『戦国期宗教勢力史論』（法蔵館、二〇一九年）
・飯沼賢司「中世イエ研究前進のための試論」上・下（『民衆史研究』二三・二四、一九八二・一九八三年）
・池浦泰憲「南北朝内乱期の祈祷寺　―妙顕寺の事例から―」（『ヒストリア』一九二、二〇〇四年）
・石井進『中世史を考える―社会論・史料論・都市論―』（校倉書房、一九九一年）
・石附敏幸「『體源鈔』にみる地下楽人豊原統秋の法華信仰」（『興風』二八、二〇一六年）
・糸久宝賢『京都日蓮教団門流史の研究』（平楽寺書店、一九九〇年）
・伊吹美保子「手猿楽「堀池」二代―宗叱・宗活事績考―」（『芸能史研究』一四七、一九九九年）
・伊藤毅『都市の空間史』（吉川弘文館、二〇〇三年）。
・伊藤正義『『堀池』―手猿楽とその周辺―」（『金剛』三二-二、一九八二年）
・井上光貞『新訂　日本浄土教成立史の研究』（岩波書店、一九七五年、旧版は一九五六年）
・今谷明『戦国時代の貴族―『言継卿記』が描く京都』（講談社、二〇〇二年、初出一九八〇年）
・今谷明『天文法華の乱―武装する町衆―』（平凡社、一九八九年、二〇〇九年に洋泉社ＭＣ新書『天文法華一揆―武装する町衆―』として復刊）
・ウェーバー、マックス『都市の類型学』（世良晃志郎訳、創文社、一九六五年、原書一九五六年）
・馬田綾子「「町衆論」の検討―概念の拡散をめぐって―」『新しい歴史学のために』一七四、一九八四年）
・馬田綾子「中世都市と諸闘争」（講座一揆３『一揆の構造』、東京大学出版会、一九八一年）
・馬田綾子「洛中の土地支配と地口銭」（『史林』六六-四、一九七七年）

・榎原雅治『日本中世地域社会の研究』（校倉書房、二〇〇〇年）
・遠藤元男『日本中世都市論』（白揚社、一九四〇年）
・遠藤珠紀「造酒司酒麹役の成立過程」（『鎌倉遺文研究』三六、二〇一五年）
・大桑斉『寺檀の思想』（教育社、一九七九年）
・大塚久雄『近代化の歴史的起点』（学生書房、一九四八年）
・大塚典弘『中世禅律仏教論』（山川出版社、二〇〇九年）
・大田壮一郎「宗論の史的考察」、天野文雄監修『禅からみた日本中世の文化と社会』（ぺりかん社、二〇一六年）
・大田壮一郎『室町幕府の政治と宗教』（塙書房、二〇一四年）
・大村拓生『中世京都首都論』（吉川弘文館、二〇〇六年）
・大村拓生「都市史における十四世紀の位置」（『日本史研究』五四〇号、二〇〇七年）
・岡佳子「本法寺教行院日富過去帳について」『特別展　光悦と能　―華麗なる謡本の世界―』（ＭＯＡ美術館、一九九九年）
・小笠原隆一「中世後期の僧位僧官に関する覚書」『寺院史研究』四、一九九四年）
・小川剛生「尺素往来の伝本と成立年代」（佐藤道生ほか編『これからの国文学研究のために　池田利夫追悼論集』、笠間書院、二〇一四年）
・奥村徹也「天文期の室町幕府と六角定頼」（米原正義先生古稀記念論文集刊行会『戦国織豊期の政治と文化』、続群書類従完成会、一九九三年）
・小野晃嗣『近世城下町の研究・増補版』（法政大学出版局、一九九三年、初出一九二八年）
・小野晃嗣『日本産業発達史の研究』（法政大学出版局、一九八一年）
・影山堯雄「京都に於ける日蓮教団寺院―寺院の移動位置を中心として―」（『大崎学報』、一一二、一九六〇年）
・影山堯雄『日蓮宗布教の研究』（平楽寺書店、一九七五年）
・笠原一男『女人往生思想の系譜』（吉川弘文館、一九七五年）
・勝浦令子『女の信心　―妻が出家した時代―』（平凡社、一九九五年）
・勝俣鎮夫『戦国時代論』（岩波書店、一九九六年）
・勝俣鎮夫『中世社会の基層をさぐる』、山川出版社、二〇一一年）
・鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』（思文閣出版、二〇〇〇年）
・苅米一志「中世前期における地域社会と宗教秩序」（『歴史学研究』八二〇、二〇〇六年）
・河内将芳「天文一揆と都市奈良」（中世都市研究会編『「宗教都市」奈良を考える』、山川出版社、二〇一七年）
・河内将芳『戦国仏教と京都―法華宗・日蓮宗を中心に―』（法蔵館、二〇一九年）
・河内将芳『中世京都の都市と宗教』（思文閣出版、二〇〇六年）

・河内将芳『中世京都の民衆と社会』(思文閣出版、二〇〇〇年)
・河内将芳『日蓮宗と戦国京都』(淡交社、二〇一三年)等。
・河音能平『中世封建制成立史論』(岩波書店、一九七一年)
・川端泰幸「中世後期における地域社会の結合―惣・一揆・国―」『歴史学研究』九八九号、二〇一九年、等)
・川嶋美喜子「京都『木屋薬師堂』考 ―土倉から薬師堂へ―」『日本宗教文化史研究』一七-一、二〇一三年)
・川本慎自「室町幕府と仏教」(『岩波講座日本歴史 第8巻中世3』、岩波書店、二〇一四年)
・神田千里「中世後期の公家社会にみる家の信心」(『東洋大学文学部紀要』第五十二集、史学科篇第二十四号、一九九八年)
・神田千里「天文の畿内一向一揆ノート」(千葉乗隆編『日本の歴史と真宗』、自照社出版、二〇〇一年)
・神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館、二〇〇七年)
・神田千里『宗教で読む戦国時代』(講談社、二〇一〇年)
・神田千里『戦国時代の自力と秩序』(吉川弘文館、二〇一三年)・冠賢一『京都町衆と法華信仰』(山喜房仏書林、二〇一〇年)
・冠賢一編著『近世法華経談義聞書』(平楽寺書店、二〇〇三)
・木内正広「鎌倉幕府と都市京都」(『日本史研究』一七五号、一九七七年)
・菊地大樹『中世仏教の原形と展開』(吉川弘文館、二〇〇七年)
・鍛代敏雄『戦国期の石清水と本願寺 ―都市と交通の視座―』、法蔵館、二〇〇八年)
・鍛代敏雄『中世後期の寺社と経済』(思文閣出版、一九九九年)
・木下昌規編著『シリーズ室町幕府の研究3 足利義晴』、戎光祥出版、二〇一七年)
・木下政雄「京都における町組の地域的発展―上京立売組を中心として―」(『日本史研究』九二、一九六七年)
・京都市編『京都の歴史』(全十巻、学藝書林、一九六八～一九七六年)
・京都像門本山会 編『第六百五十遠忌記念 大覚大僧正』(京都像門本山会、二〇一四年)
・桐山浩一「十六世紀後半の京都における銀の貨幣化」(『ヒストリア』二三九、二〇一三年)
・金龍静『一向一揆論』、吉川弘文館、二〇〇四年)
・桑山浩然『室町幕府の政治と経済』(吉川弘文館、二〇〇六年)
・久留島典子「戦国期の酒麹役 ―『小西康夫氏所蔵文書』を中心に―」(石井進編『中世をひろげる ―新しい史料論をもとめて―』、吉川弘文館、一九九一年)
・久留島典子「中世後期の社会動向―荘園制と村町制―」『日本史研究』五七二号、二〇一〇年)
・黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』(岩波書店、一九七五年)

・五島邦治『京都　町共同体成立史の研究』（岩田書院、二〇〇四年）
・小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』（清文堂出版、二〇〇三年）
・古藤真平「仁和寺の伽藍と諸院家　中」『仁和寺研究』二、二〇〇一年）
・小西顕龍「日隆教団の法度について　中世制定の法度を中心として」（『桂林学叢』二五、二〇一四年）
・小西瑞恵『中世都市共同体の研究』（思文閣出版、二〇〇〇年）
・近藤祐介「１５～１７世紀における門跡寺院と地域社会」（『歴史学研究』九七六、二〇一八年）
・佐々木銀彌「商業・都市・交通」『日本古文書学講座　第５巻　中世編Ⅱ』（雄山閣出版、一九八一年）
・佐々木銀彌『日本中世の都市と法』、吉川弘文館、一九九四年）
・佐藤進一「室町幕府論」（『日本中世史論集』、岩波書店、一九九〇年、初出一九六三年）
・佐藤博信・坂井法曄【史料紹介】安房妙本寺蔵　日要上人於禁裏御法門十五ヶ条」（『千葉大学人文社会科学研究』一九、二〇〇九年）
・坂田聡『日本中世の氏・家・村』、校倉書房、一九九七年）
・桜井英治「土倉の人脈と金融ネットワーク」（村井章介編『「人のつながり」の中世』、山川出版社、二〇〇八年）
・桜井英治『交換・権力・文化　ひとつの日本中世社会論』（みすず書房、二〇一七年）
・桜井英治『室町人の精神』（講談社学術文庫、二〇〇九年、初出二〇〇一年）
・設楽薫「大館尚氏略伝」、桑山浩然『室町幕府関係引付史料の研究』（科学研究費補助金研究成果報告書、一九八九年）
・柴佳世乃「伏見宮と法華経談義　心空・鎮増との関わりに及んで」（松岡心平編『看聞日記と中世文化』、森話社、二〇〇九年）
・渋谷一成「戦国期近衛家経済と貸借関係・洛中地子」（『立命館史学』二十五、二〇〇四年）
・清水三男『日本中世の村落』（清水三男著作集２、校倉書房、一九七四年、初出一九四二年）
・清水廣一郎『イタリア中世の都市社会』（岩波書店、一九九〇年）
・下坂守『中世寺院社会と民衆　衆徒と馬借・神人・河原者』（思文閣出版、二〇一四年）
・下坂守『中世寺院社会の研究』、思文閣出版、二〇〇一年）
・菅原正子『中世公家の経済と文化』（吉川弘文館、一九九八年）
・杉森哲也『近世京都の都市と社会』（東京大学出版会、二〇〇八年）
・杉山博『庄園解体過程の研究』、東京大学出版会、一九五九年）
・鈴木信吉「法華八講と道長の卅講」（上）（下）（『仏教芸術』七七、七八、一九七一）
・瀬田勝哉「近世都市成立史序説―京都における土地所有をめぐって―」（寶月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七年）

・瀬田勝哉『【増補】洛中洛外の群像』平凡社、二〇〇九年、初出一九九四年）
・関山和夫『説教の歴史的研究』（法蔵館、一九七四年）
・平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）
・高橋幸八郎『市民革命の構造』（御茶の水書房、一九五〇年）
・高橋康夫『中世都市京都の研究』（思文閣出版、一九八三年）
・高橋康夫編集・中世都市研究会編集協力『中世都市研究１２　中世のなかの「京都」』（新人物往来社、二〇〇六年）
・高橋秀樹『日本中世の家と親族』（吉川弘文館、一九九六年）
・高橋慎一朗『日本中世の権力と寺院』（吉川弘文館、二〇一六年）
・高橋慎一朗『日本中世の権力と寺院』（吉川弘文館、二〇一六年）
・高谷知佳『中世の法秩序と都市社会』（塙書房、二〇一六年）
・高田陽介「戦国期京都に見る葬送墓制の変容」（『日本史研究』四〇九、一九九六年）
・高田陽介「寺請制以前の地域菩提寺とその檀家」（勝俣鎮夫編『中世人の生活世界』、山川出版社、一九九六年）
・高田陽介「境内墓地の経営と触穢思想―中世末期の京都に見る―」（『日本歴史』四五六、一九八六年）
・高尾一彦「京都・堺・博多」（『岩波講座日本歴史』第９巻近世一、岩波書店、一九六三年）
・高木豊「解説」『日本思想大系十四　日蓮』（岩波書店、一九七〇年）
・高木豊「京畿日蓮教団の展開」（影山堯雄編『中世法華仏教の展開』、平楽寺書店、一九七四年）
・高木豊『平安時代法華仏教史研究』（平楽寺書店、一九七三年）
・竹田聽洲『民俗仏教と祖先信仰』（東京大学出版会、一九七一年）
・竹田聽洲『日本人の「家」と宗教』（評論社、一九七六年）
・田坂泰之「室町期京都の都市空間と幕府」（『日本史研究』四三六号、一九九八年）
・田中貴子『室町お坊さん物語』（講談社、一九九九年）
・田中克行『中世の惣村と文書』（山川出版社、一九九八年）
・玉城玲子「近世初頭山城国乙訓郡鶏冠井法華宗関係史料について」（『史朋』二七、仲村研同人追悼号、一九九二年）
・圭室諦成『葬式仏教』、大法輪閣、一九六三年）
・中世後期研究会編『室町・戦国期研究を読みなおす』（思文閣出版、二〇〇七年）
・中世都市研究会編『中世都市研究』第三号『津・泊・宿』（新人物往来社、一九九六年）
・中世都市研究会編『中世都市研究』第一七号『都市的な場』（山川出版社、二〇一二年）

・辻善之助『日本仏教史　中世史篇之四』（岩波書店、一九五〇年）
・戸田芳実『初期中世社会史の研究』（吉川弘文館、一九九一年）
・戸田芳実『日本領主制成立史の研究』（岩波書店、一九七二年）
・豊田武著作集第１巻『座の研究』（吉川弘文館、一九八二年）
・豊田武著作集第２巻『中世日本の商業』吉川弘文館、一九八二年）
・豊田武著作集第４巻『封建都市』（吉川弘文館、一九八三年）
・豊田武著作集第７巻『中世の政治と社会』（吉川弘文館、一九八三年）
・中井真孝『法然伝と浄土宗史の研究』（思文閣出版、一九九四年）
・中井信彦『町人』（日本史の社会集団５、小学館、一九九〇年、初出一九七五年）
・永島福太郎「都市自治の限界―奈良の場合―」（『社会経済史学』一七-三、一九五一年）
・中ノ堂一信『中世勧進の研究　―その形成と展開―』（法蔵館、二〇一二）
・中尾堯「安土宗論の史的意義」（『日本歴史』一一二、一九五七年）
・中尾堯『日親　―その行動と思想―』（評論社、一九七六年）
・中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』（吉川弘文館、一九九九年）
・中尾堯『日蓮真蹟遺文と寺院文書』（吉川弘文館、二〇〇二年）
・永原慶二『２０世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年）
・永原慶二『日本の中世社会』（永原慶二著作集第一巻、吉川弘文館、二〇〇七年、初出一九六八年）
・仁木宏「宗教一揆論」（『岩波講座日本歴史』第９巻中世４、岩波書店、二〇一五年）
・仁木宏「中世都市大山崎の展開と寺院―平安～織豊期の都市構造―」（『史林』七五-三、一九九二年）
・仁木宏「都市文書と都市社会」『今日の古文書学　第３巻　中世』（雄山閣出版、二〇〇〇年）
・仁木宏『京都の都市共同体と権力』（思文閣出版、二〇一〇年）。
・仁木宏『空間・公・共同体―中世都市から近世都市へ―』（青木書店、一九九七年）
・仁木宏「戦国京都首都論―首都社会・都鄙関係の変動と戦乱―」（『歴史評論』八二三号、二〇一八年）
・西尾知己『室町期顕密寺院の研究』（吉川弘文館、二〇一七年）
・西尾和美「「町衆」論再検討の試み　―天文法華一揆をめぐって」（『日本史研究』二二九、一九八一年）
・羽下徳彦「室町幕府侍所考」（『中世の窓』一三、一九六三年）
・羽仁五郎『都市の論理　歴史的条件-現代の闘争』（勁草書房、一九六八年）

・橋本春美「土倉の存在形態」(『史窗』一九号、一九六一年)
・馬部隆弘『戦国期細川権力の研究』(吉川弘文館、二〇一八年)
・早島大祐「戦国期研究の位相―中世、近世、そして現代から―」(『日本史研究』五八五号、二〇一一年)
・早島大祐『首都の経済と室町幕府』(吉川弘文館、二〇〇六年)
・林屋辰三郎『中世文化の基調』(東京大学出版会、一九五三年)
・原田正俊「室町仏教と談義・芸能」(『芸能史研究』一八三、二〇〇八年)
・原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」(浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座蓮如』4、平凡社、一九九七年)
・原田伴彦『中世における都市の研究』(大日本雄弁会講談社、一九四二年)、同『日本封建都市研究』(東京大学出版会、一九五七年)
・兵藤裕己『太平記〈読み〉の可能性　歴史という物語』(講談社学術文庫、二〇〇五年、初出一九九五年)
・ピレンヌ、アンリ『中世都市　社会経済史的試論』(佐々木克巳訳、講談社、原書一九二七年)
・廣田哲通「『鎮増私聞書』からみた直談・談義」(『春秋』三二五、一九九一年)
・福田徳三『日本経済史論』(坂西由藏訳、宝文館、一九〇七年、原書一九〇〇年)
・藤井學「西国を中心とした室町期法華教団の発展　―その社会的基盤と法華一揆を中心として―」(『仏教史学』六―一、一九五二年)
・藤井學『法華文化の展開』(法藏館、二〇〇二年)
・藤井學『法華衆と町衆』(法藏館、二〇〇三)
・藤木香代子「町衆手猿楽について」(『史論』十三、一九六五年)
・藤本誉博「室町期・戦国期における堺の都市構造―会合衆の再検討」(『ヒストリア』二二〇号、二〇一〇年)
・古川元也「「天文法華の乱」再考―「山門大講堂三院衆議条々」第一条の検討を中心に―」(『年報三田中世史研究』四、一九九七年)
・古川元也「京都新在家の形成と法華宗檀徒の構造」(中尾堯編『中世の寺院体制と社会』、吉川弘文館、二〇〇二年)。
・古川元也「京都妙覚寺墓地の無縁石造物考　―中近世移行期の葬送と石造造立―」(『神奈川県立博物館研究報告　人文科学』二八号、二〇〇二年)
・古川元也「中近世移行期の法華宗寺内組織と檀徒の構造」(今谷明・高埜利彦編『中近世の宗教と国家』、岩田書院、一九九八年)
・古川元也「天正四年の洛中勧進」(『古文書研究』三六、一九九二年)
・朴澤直秀『近世仏教の制度と情報』(吉川弘文館、二〇一五年)
・細川武稔『京都の寺社と室町幕府』(吉川弘文館、二〇一〇年)
・本郷恵子『中世公家政権の研究』(東京大学出版会、一九九八年)
・松山宏『日本中世都市の研究』(大学堂書店、一九七三年)
・松尾剛次『勧進と破戒の中世史』(吉川弘文館、一九九五年)

・三浦周行『日本史の研究』第1輯、岩波書店、一九二二年）
・三浦周行『大坂と堺』（朝尾直弘編、岩波書店、一九八四年）
・三枝暁子「「町」共同体をめぐって」（『歴史科学』二一八、二〇一四年）。
・三枝暁子「中世の身分と社会集団」（『岩波講座日本歴史　第7巻・中世2』、岩波書店、二〇一四年）
・三枝暁子「中世後期の宗教的結合と都市社会」（『歴史評論』七七〇、二〇一四年）
・三枝暁子「日本中世都市史研究の二〇年」（『都市史研究』1、二〇一四年）
・三枝暁子「脇田晴子の中世都市論をめぐって」（『歴史学研究』九六九号、二〇一八年）
・三枝暁子『比叡山と室町幕府　寺社と武家の京都支配』（東京大学出版会、二〇一一年）
・美川圭「中世成立期の京都―権門都市の成立―」（『日本史研究』四七六号、二〇〇二年）
・宮崎英修『不受不施派の源流と展開』（平楽寺書店、一九六九年）
・村井祐樹『戦国大名佐々木六角氏の基礎的研究』（思文閣出版、二〇一二年）
・村井祐樹『六角定頼』（ミネルヴァ書房、二〇一九年）
・村山修一『日本都市生活の源流』（国書刊行会、一九八四年、※初出一九五三年）
・村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』（中央公論社、一九七九年）
・百瀬今朝雄「文明十二年徳政禁制に関する一考察」（『史学雑誌』六六‐四、一九五七年）
・森岡清美『真宗教団と「家」制度』（創文社、一九六二年）
・森田恭二「中世京都法華『寺内』の存在　―六条本国寺を中心として―」（『ヒストリア』九六、一九八二年）
・湯川敏治『戦国期公家社会と荘園経済』、続群書類従完成会、二〇〇五年）
・湯浅治久『戦国仏教　―中世社会と日蓮宗―』（中央公論新社、二〇〇九年）
・矢内一磨「文明年間の大徳寺と堺町衆に関する新史料について」（『日本史研究』三九六、一九九五年）
・柳田國男『都市と農村』（柳田國男全集4、筑摩書房、一九九八年、初出一九二九年）
・柳田國男『日本農民史』（柳田國男全集3、筑摩書房、一九九七年、初出一九三一年）
・山崎誠「直談以前」（『春秋』三三〇、一九九一年）
・山田徹「室町領主社会の形成と武家勢力」（『ヒストリア』二二三号、二〇一〇年）
・山田邦明「戦国の争乱」（『岩波講座日本歴史』第9巻中世4、岩波書店、二〇一五年）
・芳澤元「中世後期の社会と在俗宗教」（『歴史学研究』九七六号、二〇一八年）。
・芳澤元『日本中世社会と禅林文芸』（吉川弘文館、二〇一七年）

・吉田伸之『近世都市社会の身分構造』（東京大学出版会、一九九八年）
・立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教団全史　上』（平楽寺書店、一九六四年）
・脇田晴子『日本中世女性史の研究』（東京大学出版会、一九九二年）
・脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』（御茶の水書房、一九六九年）
・脇田晴子『日本中世都市論』（岩波書店、一九八一年）
・脇田晴子「日本中世都市の構造」（『日本史研究』一三九・一四〇合併号、一九七四年）
・渡辺正気「中世公家生活史考　特に近衛政家の宗教生活について」（『史淵』四六、一九五一年）
・渡辺麻里子「〈直談〉の位相　談義・観心」（『天台学報』四三、二〇〇一年）

【論文の内容の要旨】

本論文は、戦国期京都における都市民の社会的結合のひとつとして、法華宗（日蓮宗）信仰を紐帯とする宗教的結合を取り上げ、その特色と変遷を追究したものである。こうした考察を通じて、中世から近世への移行過程において日本社会に起こった転換を、京都という都市社会をフィールドとし、法華宗という断面によって切り取ることを目指す。

序章では日本中世都市にかんする研究史を整理し、法華宗という主題が研究の現状において持つ意義を明らかにする。敗戦後の自由都市論は日本における近代市民社会の確立という問題意識にもとづき、西欧中世都市との比較を通じて日本中世都市の特質を明らかにした。1970 年代の自由都市論批判を経て一九九〇年代以降の研究では、戦国期京都における地縁的な町共同体の形成過程が中世都市史の中核的な課題となった。法華宗は中世後期京都の都市民に深く浸透した宗派であり、町共同体の形成過程を明らかにするためには、法華宗信仰にもとづく都市民の宗教的結合と、戦国期に新たに形成される地縁的結合との関係を考察する必要がある。従来の法華宗研究は天文初期の法華一揆をめぐる議論に局限されており、法華宗教団の長期的な動向を踏まえて宗教的結合の変遷を分析する視角に乏しいという根本的な欠陥があった。以上を踏まえた上で現状において法華宗を取り上げることにより、都市における共同体の形成という、中世社会と近世社会を画する問題の研究を、大きく進展させることができると予想される。

第一部「法華宗の勢力拡大過程」では、鎌倉後期に東国から京都に進出した法華宗が都市社会に浸透していく過程を考察する。

第一章「室町戦国期京都における法華宗諸門流の動向」においては、南北朝期から公武権力と結びついて社会的地位を向上させていった日像門流系寺院と、都市民に対する布教活動によって勢力を拡大した後発門流系寺院というふたつの類型によって、京都進出以降の法華宗の動向を整理した。これによって、顕密体制論の方法論的影響を強く受けた近年の仏教史研究が、室町期以前と戦国期を統一的に捉える上で方法論的な難点を有していること、中世の法華宗については多数の門流の分立競合状況を踏まえて考察すべきであることを指摘した。

第二章「室町戦国期京都における談義の展開」では、法華宗の主要な布教活動として「談義」と呼ばれる説法に着目した。談義は天台律・禅・浄土系など多様な僧侶によって行われ、15 世紀初頭から京都において流行した。法華宗は法華経談義を活発に行い、強硬な他宗批判を展開することによって、都市民のあいだで多数の信徒を獲得した。多様な宗派が競合する都市社会において信徒を獲得するためには、みずからの教義の正当性を俗人にとって合理的に納得できる形で提示する必要があり、談義はその手段となっていた。多くの都市民がこうした談義を聴聞してみずからの判断力で宗派を選択する経験を積んでいたことは、戦国期におけるキリスト教受容のありかたをも規定したと見られる。

補論①「戦国期京都の法華宗信仰―近衛家の事例から―」では、房嗣・政家・尚通の三代にわたって法華宗に帰依していた近衛家の事例を取り上げることで、戦国期における法華宗信仰の特質を考察した。その結果、信徒と寺院の結びつきを世代を超えて維持する上で追善仏事が重要な役割を果たしたこと、女性信徒が家に法華宗が浸透する媒介となっていたことを指摘した。

第二部「戦国期宗教勢力としての法華宗」では、戦国期の法華宗が都市民を基盤として宗教勢力化していく過程を取り上げる。

第三章「戦国期京都の酒屋・土倉と法華宗」では、富裕な高利貸し業者であり中世京都の有力都市民である酒屋・土倉のあいだに、応仁の乱前後から多数の法華宗信徒が現われていることを指摘した。中世京都の酒屋・土倉に対しては、山門延暦寺が祭礼役徴収にもとづいて強い支配力を有していた。それゆえ

酒屋・土倉に法華宗が浸透することによって、法華宗と山門のあいだには潜在的な対抗関係が生じたと見られる。15 世紀末には室町幕府財政を管理する公方御倉に法華宗系の俗人土倉が就任していることが確認できるが、天文五（一五三六）年の天文法華の乱後には山門系の正実坊が公方御倉に返り咲いている。このことは、酒屋・土倉をめぐる法華宗と山門との対抗関係が、両者が全面衝突する天文法華の乱の前提になっていたことを示している。

第四章「天文初期の畿内情勢と法華一揆の活動」では、天文初期（一五三二～一五三六）における法華一揆の活動と、同時期における法華宗教団・信徒の変容の過程を考察した。法華一揆は天文元年に将軍足利義晴と細川晴元が一向一揆勢力に対抗するため、京都の法華宗寺院に軍事動員を行なったことを契機として成立する。法華一揆成立当初の軍事行動は一向一揆に対する自衛という性格が強かったが、天文元年末以降は義晴・晴元の上洛戦への協力によって、教団として積極的な利益を追求するようになった。本章では当該期における法華宗と義晴・晴元との結びつきを重視することにより、法華一揆の様々な活動を都市民による京都市政権の掌握・自治の実現として評価してきた先行研究の構図に対し、根本的な批判を加えた。また、軍事行動の経験を通じて寺院や門流の枠を超えた「法華宗」としての結束が醸成されること、これにともなって信徒同士の結合も変質していくことを指摘した。先行研究は法華宗信仰を紐帯とすることで都市民の大規模な動員が可能になったと考えてきたが、むしろ天文期の軍事動員を通じて法華宗としてのまとまりが形成された面があったのである。天文法華の乱については、山門が幕府（義晴・晴元政権）黙認のもとで法華宗を弾圧したという今谷明の理解を批判し、乱の背景に義晴・晴元と結びついた法華宗の権益と山門の権益との対立が存在したこと、乱の最終局面では六角定頼の意向が決定的な意義を持ったことを指摘した。

第三部「都市民の社会的結合と法華宗」では、天文法華の乱後に復興を遂げた法華宗教団の特質と、信徒の社会的結合の実態を考察した。

第五章「天正四年洛中勧進に見る法華宗教団と信徒」では、天正四（一五七六）年に法華宗教団が実施した洛中勧進にかんする史料（勧進史料）に対して基礎的な分析を加えた。勧進史料に見られる微細な書き込みを分析することにより、洛中勧進においては出資の可否や出資額の決定が最終的には信徒側の自発性に委ねられていたことが明らかになる。法華宗教団は勧進によって集まった資金を織田信長政権への献金に充てることで、教団・信徒としての積極的な利益を追求していた。それゆえ多くの法華宗信徒は自己の利益追求のためにも、勧進に出資する動機を有していたのである。法華宗が教団（諸本山が結成した「会合」と呼ばれる合議組織）として勧進を実施し、多数の信徒が門流の枠を超えて出資に応じるという事態は、天文期における軍事行動および復興に向けた協力の経験を前提として初めて可能になった。武家権力と結びつくことで教団・信徒全体として門閥化を志向することが、天文期以降の法華宗の一貫した戦略だったといえる。

第六章「戦国期京都における都市民の社会的結合と「家」」では、多様な社会的結合の結節点としての「家」に着目し、法華宗信徒における宗教的結合の実態と、戦国期における新たな地縁的結合の形成過程を考察した。まず勧進史料における「家」という用語の内実を分析することによって、家と一族の関係、勧進史料における女性信徒の位置付け等を明らかにした。これを踏まえて上京の小川地域に着目し、同地域が武家政権周辺の需要に応じる一種の工房街となっていたこと、地域住民は婚姻によって密接な結びつきを形成しており、地域全体において職縁的結合から地縁的結合への転換が観察されることなどを指摘した。さらに、織物業者である大舎人座衆に着目し、西陣地域における社会的結合の実態を分析した。その結果、同地域は大舎人座衆が大宮今出川の辻周辺に定着したことで経済的に発展し、こうした辻周辺の町が中核となって新たな地縁的結合が形成されたことが明らかになった。

補論②「天正期京都における法華宗信徒の分布状況」では勧進史料に含まれる法華宗信徒約一四〇〇名のデータに統計的な分析を加え、信徒の分布状況と

地域寺院との関係を考察した。その結果、早い時期に成立した寺院には洛中全域に檀那を有する分散型が多いのに対し、遅れて成立した寺院は地域密着戦略によって周辺に多数の檀那を確保し、集中型の信徒分布を形成したことが明らかになった。また、天文法華の乱後には新たな社会階層の人々が法華宗信徒となり、教団としての基盤はむしろ強化された部分があると考えた。

終章では、論文全体の成果を概観するとともに、これらの成果を踏まえたとき今後の研究において可能となる展望を提示した。第一に、本論文は室町期以前と戦国期の仏教を統一的・動態的に把握する方法を京都の法華宗という主題に即して提示したものであり、現在の中世後期仏教史研究が直面している課題にひとつの解答を与え得る。第二に、本論文は法華宗信徒の事例を通じて都市民の社会的結合の実態を考察することで、都市に特有の共同体形成過程の解明が中世都市研究の重要な課題であることを明らかにした。現時点における展望としては、戦国期における新たな地縁的共同体の形成過程を考察するためには、多様で緊密な社会的結合を有する有力都市民の存在を重視する必要があると考えた。こうした有力住民は早い段階で永続的な家を形成し、居住地や家屋保有を安定させたことで、地縁的結合の核となることができたと見られる。流動性が高く、とうてい共同性を形成し得ないように見える都市社会において、どのような条件のもとで共同体が形成されたのか。こうした問いが、現代の戦国期都市研究において改めて問われるべきである。